

「馬場小室山遺跡フォーラム」第92回ワークショップ

【復興の原動力！パブリック・アーケオロジー2018】

馬場小室山遺跡とまちづくり環境の「かかわり」から、「山田湾文化」の復興パブリック・アーケオロジーへ

＜馬場小室山遺跡研究の新展開—縄文塚(「環提土塚」集落)の終焉から地域文化の解体にみる広域連動の解明—＞

知識・経験・思考・領域等にみられる現代的限界からの証拠に基づく知的解放を目指して活動します！

新展開1 (ムロ1) ～ (ムロ10) は以前のレ ジュメ参照	「ムロさま」の 「限界領域」打破 (墓場の公共性にみ る墓式と葬式、及び 「人骨集積」の真相)	馬場小室山遺跡「第51号土壇」から展望する縄文時代の葬墓式と「土器社会論」—「ムロさま」の 「累積型改新土坑墓」と「積葬墓」から探る「追埋設型土器棺集積墓」への途— (ムロ10)「再帰型再葬墓」の風習と巨大「再葬祭場」の出現【『利根川』40】 (ムロ11)山田町浜川目沢田Ⅰ遺跡における「大洞C1式」の「土器集積の風習」 (ムロ12)「人骨集積」から「土器集積の風習」(祭式と葬式の統合)へ【『古代』142】 (ムロ13 予告)「土器集積の風習」(祭式と葬式の統合)から「再葬壺棺墓」へ
新展開2 (オム1) ～ (オム5) は以前のレ ジュメ参照	「オムちゃん」と 「ムロさま」との 「限界知識」打破	土偶と土面／顔面付土版／人面文土器等の関係、そして容器形土偶／顔壺へ (オム6)大宮台地における人面文土器の類例追加:地獄田遺蹟2例、小林八束1遺蹟1例 (オム7)「祭式土偶」から「葬式土偶」(祭式と葬式の統合)へ【『利根川』40等】 (オム8 予告)「鬲體信仰」は「ムロさま」から容器形土偶や顔壺の土坑墓へ 【番外1】富山県の「オムちゃん」 【番外2】青森県の波状口縁頂部の内面に顔面を装飾する縄文時代後期後葉土器 【番外3】青森県の「縄文の微笑」(写真) 【番外4 予告】 福島県七社宮遺跡の人面文注口付土器
新展開3 (シオ1) ～ (シオ3) は以前のレ ジュメ参照	「シオ(塩)もん」の 「限界経験」打破 縄文時代の製塩土 器は「採鹹・せん ごう土器」が真相！ 固形塩の物流では なく、「大形魚塩蔵 品」・「汽水系塩 (海水)煮」に留ま らず、濃縮海水を 内陸で希釈する 「淡水魚(含む特 産ウナギ)塩(海 水)煮」の普及か？	「製塩土器」の確立から製塩遺跡の操業へ、爆発的普及の晩期社会と「定住制」の定着 (シオ4)下布田遺跡の「製塩土器」在地性は古鬼怒湾型変遷との乖離！／枯れたアマモを特 定の場所に集めて乾燥させる「塩草場」の存在、及び天日と地熱(熱砂)利用の採 鹹・せんごう工程に相応しい「製塩土器」鉢形態の確立 (シオ5)宇都宮市刈沼遺跡からは寺野東遺跡よりも多数の「製塩土器」が検出し、在地で淡水 魚の「塩煮」が浮上。鬼怒川流域の口縁部形態は下布田遺跡(板状工具＋ナデ調 整)とは大きく異なり、「古鬼怒湾系列」である口縁部水平ヘラカットが定着 (シオ6)三陸北部における「製塩土器」の年代と系統(1)久慈市大芦Ⅰ遺跡の長胴深鉢形態 と僅かな出土点数に注目した「採鹹・せんごう土器」の提唱 (シオ7)六十軒遺跡の「製塩土器」二者(古鬼怒湾ケズリ系列VS無文ナデ系列)の意義 【『利根川』40】 (シオ8)古鬼怒湾で後期中葉から大量出土の粗製土器とウナギのブツ切り「塩(海水)煮」／ 「採鹹・せんごう土器」の定着に果たす古鬼怒湾ウナギ「塩(海水)煮」に注目！ (シオ9)シカやサルが舐めていた「縄文山塩」の発見と「山塩煮」の縄文鍋 (シオ10)「微小貝類から想定される「葦灰」製塩の可能性」？？アマモは「藻灰」×「草灰」○ (シオ11)「製塩土器」に観る「大宮台地系列」(馬場小室山)、「武蔵野台地系列」(正網・下布田) (シオ12)古鬼怒湾の「魚食・塩(海水)煮文化」と加曾利貝塚の「貝食・塩(海水)煮文化」
新展開4	「タマきみ(君)」の 「限界思考」打破	ヒスイ製勾玉・小玉の晩期流通(関東各地域拠点でも製作)と弥生時代中期中葉「再葬壺棺 墓」への流通実態(上越周辺北信経由)解明 (タマ1)熊谷市飯塚南遺跡の土坑墓出土ヒスイ製勾玉と飯塚遺跡群 (タマ2)長野県坂城町保地遺跡の抜歯人骨とヒスイ製垂飾品の年代【『利根川』39】

1.【地域とパブリック・アーケオロジーの底力】：各地域における自然の恵みと基層文化の形成を考えよう！

1-1.【「シオ(塩)もん」研究の年末大掃除】：近藤義郎の「塩業」視点を批判(1976)し続けて40有余年！ 現在も「塩業」(＝固形塩製造)という亡霊が徘徊している？

(1)【最近の公開シンポジウム参加報告】：別添の「鴨志田隼司レポート」参照！

- ・明治大学資源利用史研究クラスター研究成果公開シンポジウム「縄文の塩Ⅱ―製塩土器の型式と技術―」に参加された鴨志田隼司さんからご自身の関心事項を中心に報告頂きます。

(2)【「塩業」以外の生活文化】：「魚食文化」に見る海水の食への利活用や塩蔵による魚類保存の展開

- ・縄文式晩期前半の霞ヶ浦沿岸における貝塚等では無文薄手粗製の所謂「製塩土器」が多出しますが、東京湾東岸の千葉市や市原市の同時期貝塚では殆ど見られません。同じ年代の生活文化にありながらも多量に使用する土器の形態に明確な違いが見られる点に、生活文化として環境適応の地域差を見て取れます。このように多量に使用する土器に違いが見られる地域差は、学史的な大森貝塚と椎塚貝塚の「加曾利B式」期でも顕著で、椎塚貝塚では大量の粗製土器を出土しますが、大森貝塚では粗製土器は少なく、煮炊きに精製土器を使用するとのモースの先鋭的な所見があります。
- ・所謂「製塩土器」も粗製土器の究極の煮沸形態であることを考慮するならば、霞ヶ浦周辺では後中葉以降粗製土器を大量使用する生活文化が明らかな地方差として展開していることになります。また、霞ヶ浦を含む古鬼怒湾の貝塚では後期になるとウナギの椎骨が大量に遺存しますので、**ウナギのブツ切り「塩(海水)煮」と粗製深鉢の大量使用との相関**が窺われる現象として極めて調和的です。
- ・所謂「製塩土器」は湾奥から河口・下流域における「魚食文化」を支える特有の技術基盤として理解できます。そうすることで、**内湾回遊の大形魚類の塩蔵による保存・物流から、河口・下流域における中形～小魚類の「塩(海水)煮」、そして内陸方面への「濃縮海水塩」搬入による淡水魚の「濃縮海水塩希釈煮」**まで、多様な発展形態として重宝された可能性が高いように思われます。他の一般的な「魚食文化」と識別するために、ここでは「**魚食・塩(海水)煮文化**」と識別します。
- ・この「**魚食・塩(海水)煮文化**」に対比して見直すべきが、千葉市の貝塚を中心に考案された「むき身説」や「干し貝説」です。「製塩土器」出現背景と共通させて思考すれば、学生時代以来経験してきた大量産出のイボキサゴは「**貝食・塩(海水)煮文化**」の産物で、**出汁の利いた塩(海水)煮鍋の素**となるでしょう。

(3)【「製塩土器」ワークショップ】：古鬼怒湾の「製塩土器」出土遺跡の実態に触れてみましょう！

- ・茨城県稲敷市**道成寺貝塚**は常総台地研究会が発掘調査し、大量の「製塩土器」が出土したことで著名ですが、残念ながら報告書は刊行されていません。今回はこの道成寺貝塚の発掘時の極一部のみの採集資料を分類しますが、実際の発掘時に斜面貝塚ではどのような纏まりで採集されるか、如何に胴部破片が主体を占めるか、実感して頂きます。その上で口縁部資料に着目して、古鬼怒湾の製作上の特徴を再確認します。

(4)【松島湾における「製塩土器」出土遺跡について】：この晩秋は里浜貝塚と二月田貝塚に行きました！

- ・3・11東日本大震災からの復興状況を松島湾でも確認すべく、宮戸島を視察しました。外海側の**月浜**とその裏側の**里浜**を視察の対象としました。月浜は海水浴場と釣り場拠点で民宿31軒と別荘2軒の地域が略壊滅。11月時点で民宿5軒のみの復興ということで、道路整備も途中で瓦礫が除去されている状況です。月浜に対して里浜は被災の様子を伝える痕跡に乏しく、里浜貝塚には訪れる多くの方々と出会いました。景勝・松島は大型バスも多く、秋の観光シーズンの賑わいで通り過ぎました。
- ・最近、松島湾における縄文時代晩期の遺跡動態について丁寧に図示・解説した下記の論文がありますので、収録図版を活用して松島湾の「製塩土器」出土遺跡について学びを進めたいと思います。

小林 圭一(2018)「松島湾における縄文時代晩期の遺跡動態」『研究紀要』第10号、(公財)山形県埋蔵文化財センター

1-2.「山田湾まるごとスクール」：復興10年を見据えた取り組みについても検討を始めましょう！

(1)第6回「山田湾まるごとスクール」(9/1-3)その後の進捗状況

- ・「**お米サンタ**」の実施：大浦仮設の交流参加者と北浜老人クラブに「お米サンタ」をお届けしました(12/4)。
＜北浜老人クラブ事務局長・東海林さん宛＞：町内で近所に大型スーパーあり。新年会用のお餅を選定
 - ・新潟県産特別栽培こがねもち(シングルパック)8袋×7箱 4,830円×7=33,810円
- ＜大浦仮設住での交流の取り纏め役・野田さん宛＞：漁村でスーパーがなく、お米を希望
 - ・新潟県産(長岡地区限定)特別栽培米コシヒカリ5kg×10袋 3,400円×10=34,000円
 - ・愛媛みかん(贈答用)2箱 7,000円×2箱=14,000円

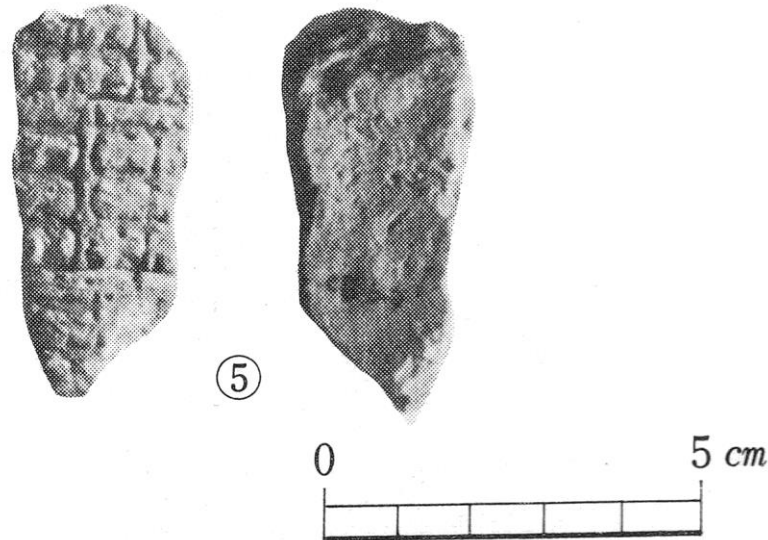
合計 81,810円

- ・第6回記録集の作成：3/3(日)発行(恒例のコンナーレフェスティバルにて配布)予定

葛飾グループ5名の参加も得て12名での実施記録を作成予定。大浦では仮設住宅から全員の移転が終了しました。これまでとは違った環境での新しい生活に慣れるとよいのですが…。

(2)「山田湾と水産考古学」： 山内清男「サケ・マス論」の神髄に迫る学びを展開します！

- ・吉里吉里の崎山弁天遺跡(貝塚)から出土した縄文時代早期後葉の土器の胴部片中に1片ですが**サケの椎骨を押型文のように転がした文様**が検出されています。現在、**早期後葉から前期中葉にかけて北海道から福島県の範囲でサケやニシンの魚骨文**の例が知られ、そこには土器を作る女性の感性も窺われます。



- ・今後、縄文時代研究における山内清男「サケ・マス論」の意義を学び、東日本の弥生時代形成を阻む要因としても「サケ・マス論」から考えてみたいと思います。

(3)「山田湾と蝦夷考古学」： 松本健速の馬飼説に対し、製鉄の可能性を検討しましょう！

- ・＜問題提起：五十嵐聡江さんの疑問から＞：房ノ沢墳墓群は何故急斜面に立地するのか？

背景：松本健速により馬飼集団と考えられている蝦夷ですが、五十嵐さんが指摘しているように北上川上流域周辺から馬淵川流域にかけての蝦夷墳墓群の殆どは、「丹後平」に代表されるように「**何々平**」という地名です。こうした立地は松本説に有利だと思いますが、では、房ノ沢墳墓群と長根墳墓群はどうして共通する立地作法を採らないのでしょうか。役人がいる遠野の高瀬遺跡の墳墓(「末期古墳」)は平坦地ですので、やはり**急斜面立地は集落構成上の比較優位な他との相違点**になります。

問題の所在：房ノ沢のように長期に亘り多くの墳墓群を形成する場合、墳墓群として維持・運営するためには、**急斜面の日常的あるいは定期的な管理が必要**になります。では、急斜面を管理する事に生業上の意義は見られないでしょうか。

馬飼集団と「何々平」は牧として整合的です。となると、**急斜面の活用を生業に観る視点**が新たに必要になりませんか？

新たな視点：製鉄の燃料となる**炭や薪の原料の丘陵地帯における調達と急斜面の活用**です。「山田湾の蝦夷考古学」はこれまでの城柵研究との訣別を意味します。また、蝦夷の実態を見極めようとしている松本説にも蝦夷の多様性を生み出す背景(土器でいうと「山田湾1式」のハケメ作法の意義)から再考を促す(**蝦夷の律令との密結合的な経済形態に注目**する)必要があると考えます。

- ・＜近年の発掘成果から＞：陸奥国における製鉄の開始は7世紀に遡る？

菅原祥夫 (2018)「郡山Ⅰ期官衙と製鉄—陸奥国行方郡真野郷の畿内系土師器をめぐって—」『福島考古』第60号記念号、福島県考古学会

「太平洋沿岸の北限の旧国造域では、**7世紀第3四半期に旧浮田国造域の宇多・行方郡で東日本最大級の製鉄コンビナートが成立**し、以後、周囲に範囲を拡大しながら対蝦夷政策の大量需要を支えた。」(p.97)

荒木 隆 (2018)「陸奥南部における石城国の役割を探る」『平成30年度 福島県考古学会 第60回大会 発表要旨』、福島県考古学会

③製鉄遺跡群から見えるもの

i) 宇多国造城（宇多評・行方評）の特殊性

ア) 7世紀後半に東北で最初に製鉄技術を導入し、大規模製鉄遺跡群を形成

→石城国北端に大規模製鉄コンビナートを展開し、平安時代まで継続操業
(それ以前から操業している善光寺窯跡群の技術者を中心に技術習得か?)

※善光寺窯跡群＝東北で唯一、大化改新以前から操業している須恵器窯

→周辺地域より早い段階で窯業技術が導入される特異な地域

→ヤマト政権側の技術導入により安定支配強化を図る地域＝東北経営の拠点

イ) 6世紀前半段階で宇多地方の優越性を示す資料＝真野 20号墳の金銅製双魚佩

金銅製双魚佩＝近江出自の継体王朝と関係の深い豪族の墓から出土

地名の「真野」＝近江国滋賀郡真野郷 ※地名や遺物の共通性

ウ) 宇多国造＝周辺の国造とは違った系譜を持つ国造＝陸奥南部では独立した系譜

＝陸奥南部で有力首長が不在段階に近江と交流を持っている特異な豪族

→ヤマト政権側から東北支配を進める重要地域と認識された宇多地方

→宇多地方が重要視される背景＝東北海上交通路を支える宇多と石城

(仙台湾～阿武隈川河口：亘～松川浦：宇多～小名浜湾：石城～那珂川河口)

(4)「山田湾と防災・減災考古学」： 齋藤瑞穂さんと齋藤友里恵さんによる継続的な深耕

・三陸を含む東日本全体の人類史的動向から山田湾で判明している事象などについて解説して頂きます。

(5)最近の記事

ジョージアの鐘が鳴る山田町

ノンフィクションライター 最相 葉月



あすへの話題

2018・12・15

日本でキリスト教といえばカトリックやプロテスタントが思い浮かぶが、幕末に伝わったもう一つ大きな流れがある。函館のロシア領事館付司祭として来日したニコライが伝えた正教(オーソドックス)だ。函館ハリストス正教会や東京お茶の水のニコライ堂といえば、観光名所として知る人もいるだろう。ちなみにハリストスとは「キリスト」のロシア語訳だ。

先月、岩手県下閉伊郡山田町にある山田ハリストス正教会の新会堂が完成した。山田町は東日本大震災による火災で沿岸部一帯が全焼。今年3月に追悼式を取材したときはまだプレハブの仮会堂だったが、8年目にしようやく土地のかさ上げが一段落し、再建された。今月2日、会堂と神のつながりを回復するための祈禱を行う「成聖式」があったのでお祝いにいった。

山田町にはキリスト教会が一つしかなく、クリスチャンといえば正教の信者を指す。先祖代々の信者も多く教会はわが家も同然。再建が叶い、「これで孫子の代まで伝えていける」という安堵の声が聞こえた。「終わりの場所と始まりの場所ができてよかった」という切実な感想もあった。

山田町は過去に何度も津波や火災の被害を乗り越えてきた。正直いえば町はまだ復興途上だが、来春、宮古と釜石をつなぐ山田線が運行を再開すれば人が行き交い、風通しがよくなるだろう。神戸で活動するジョージア(グルジア)の音楽家が正教の国である母国から取り寄せて寄贈した「復活の鐘」が、小さいけれど祈りのこもったあたたかな音を山田の町に響かせた。一人でも多くの人の心に届きますように。

2.【その他情報交換など】： 自由な意見交換とワイン・アーケオロジー

2-1. 今後のワークショップ関連日程について

- ・1/20(日) : 第93回崎房新田遺跡出土土器(10/27(土)に第3回目の分類実施)ワークショップ
★5/4(みどりの日)の「青空考古学教室」にて活用予定
- ・3/3(日) : 第94回「山田湾まるごとスクール」ワークショップ
★3/2(土)・3(日)の両日はコムナーレフェスティバル
- ・3/31(日)or4/7(日) : 第95回見沼田んぼ de お花見ワークショップ
- ・5/4(みどりの日) : 馬場小室山遺跡のクリーンアップと青空考古学教室、続いて第96回ワークショップ

2-2. 各地で行われた企画展の動向

- ・「天王山式」や「大木式」などの標識資料企画展の紹介

2-3. その他

以上